
嘘つきの系譜

上葵

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘つきの系譜

【Nコード】

N4604S

【作者名】

上葵

【あらすじ】

風の噂で二人が別れたことを聞いた。

僕はボロアパートの我が家で、夜空を見ながら祝杯をあげる。

美しき思い出に乾杯。

（前書き）

満開とまではいかない5分咲きの桜の木、その幹に寄りかかりながら彼女は挑発的な微笑を浮かべ、春風とともに静かに呟いた。

「そのナイフで私が殺せると思うなら、試してみて」

もとより殺す気なんてなかった。突然彼女が何を言い出したのか理解出来なかったし、なぜ僕の右手にナイフが握られているのかも不思議でたまらなかった。

「あなたが自分で思う一番やりやすい位置それを突き立てるだけ」

ナイフを指し示し、能面のような顔をくしゃりと歪ませて澄んだ双眸は僕を映していた。

「何を、言って……」

「わかるでしょ？」

「どうしろって言うんだ」

「言葉は短く単調な方がいい」

頭の中で、理性の鎖が千切れ飛ぶ音が響く。

「殺して」

その言葉が鼓膜を揺らした時、待つてましたと言わんばかりに石炭をくべた蒸気機関のようなカツと熱いなか僕の全身を駆けめぐった。

殺意。この感情に名前をつけるなら、それだ。

「っあ」

悲鳴は短かった。僕のナイフは彼女の心臓の位置に、深く突き刺さっている。充分すぎるくらいの致命傷。それなのに僕はさらに強く彼女の胸にねじ入れた。まるで砂場をほじくるように。

「さよなら、」

断末魔ではない。ましてや死に際のメッセージなんて綺麗なものでも。臨終の言葉を与えられるほど時間があつたわけではないのに、

彼女の言葉は確かに僕の耳に届いていた。

「大好きだったよ……」

桜の木の下には死体が埋まっているという。だからあんなに綺麗な花を咲かせるのだと。

4月1日。世界は至って平凡で変化の兆しなんてこれっぽっちも存在していなかった。

だけど、僕はその日その噂を覚えてくれた彼女の死体を、生前言われた通り桜の木の下に埋葬している。前もって覚悟していたことなので、こぼれ落ちる涙の雫はきつと気のせいだ。

友達がビルから飛びおりて死んだ夜。僕はベッドの中で夢を見る。

野球部の練習試合を、フェンスの外からぼんやりと眺める夢。過去の残滓。

缶コーヒーを制服姿の彼女に差し出し、僕は隣に腰掛ける。辺りはどんよりとした夕闇に包まれ、景色は夜へと変化していく。彼女は「ありがとう」と端的に礼を告げ、あの時みせた笑顔を僕にむける。

快打音が響き、ボールが守備陣の間を抜ける。目にも留まらぬスピードでバッターが一塁に滑りこむ。セーフ。

ピッチャーは絶不調。

バカス力打たれて、すでに6点目。我らがエースは頼りない。小さなため息を彼女は白い息とともに吐き出した。

この時、僕は、ざまあみろ、と思ったんだ。

あいつは推薦枠を易々ととるくらい、良く出来たピッチャーだった。練習とはいえ試合であんなに打たれることは滅多にない。

だから、僕の網膜に焼き付いているのだろう。

「がんばれ」

と、彼女が小さく応援する。

君は一年後、肘を壊したあいつに捨てられる。青すぎる夢を見すぎて、頑張りすぎたアイツは君を簡単に裏切るんだ。

予知能力者でもない僕は、そんな簡単なことも言えなかった。

卒業してから久しぶりに会った彼女はげっそり痩せていて、僕に無表情に語りかけた。

「彼が元気ない」「わたしにできること、」「どうすれば」

知るか知るか知るか知るか知るか。僕が下唇を噛んでいることに彼女は気づいていない。

平坦な声で落ちこむ彼女を慰めるだけだった。

あいつとは小学生のころからの旧友だった。

僕とあいつを含めた5人くらいで、自転車を飛ばしたり、廃ビルでかくれんぼをしたり、喧嘩をしたり、みんなでプールに行ったり、昨日見たバラエティーで笑いころげたり、漫画の話をしたり、おもちゃで遊んだり、泥だらけになるまでバカしあったり、いろんなことをした。

あの時、野原に作った秘密基地は、僕らの思い出とともに更地になってマンションが建った。

ふざけた名前をつけて、みんなでこっそり育てた子猫は、トラツクに弾かれ赤い花を咲かせた。

小学校は少子化の影響で去年廃校になり、僕らが埋めたタイムカプセルはすっかり行方知れずになった。

集合場所だった児童館は墓標のようなシヨベルカーが並び、大好きだったバラエティー番組は打ち切られてクイズ番組になった。クラスメートの一人はガンになって死んだ。

あの時の友人たちはどこかに行き、僕らは別の未来を歩んだ。

それでも、あの夏の、滴る汗といっしょにこぼした少年時代を僕は忘れない。父と母が離婚する前の、鬱屈とした僕を助けてくれたのは、友人と呼べる彼らだけなのだから。

小学校を卒業し、僕らに交流はなくなった。あいつと僕は別の中

学にいき、別の友達をつくった。

高校に入って僕らは再会した。屈託ない球児らしい笑顔で野球部に勧誘されたけど、僕はやりわりと断った。

運動部は受験の邪魔だと思っていたからだ。僕は楽そうという理由だけで文芸部に入部した。

幼き日の回顧に捕らわれる高校生がいるはずがない、僕らはすでに別の道を歩んでいるのだから。

文芸部で彼女と出会った。知的で、笑顔がかわいい同級生。好きになるのに時間はかからなかった。

僕の感情をアシストするように僕らはぐんぐん仲良くなった。二人きりで映画を見に行き、サイゼリヤでご飯を食べた。

ユーモアがない僕のジョークを彼女はクスクスと息を立てずに笑う、その時にできる彼女のえくぼが堪らなく愛しかった。

あいつは僕を橋渡しに選んだ。

「気になる女の子がいるんだけど」

名前を聞くまで協力的だった僕は、まんまと乗せられてしまったわけだ。

断ってもよかったけど、自分の好きな人が知られるのが恥ずかしいという、いかにも安っぽいくだらない感情だけで、僕は彼女を紹介してしまった。なんてバカな、死んでしまえ！過去の僕にそう怒鳴りつけたい。

二人が付き合いはじめた時、僕はどんな顔をすればいいのかわからなかった。

「おめでとう」

それでも、祝福の言葉を述べた僕は間違いなく道化だった。

素晴らしき友と憧れの君、似合わないはずがないだろう。無理やり自分に叩きこむ。おめでとうおめでとうおめでとう。

その時の僕は、感情を殺し、一歩さがった自分が、小説の登場人

物みたいにクールだと勘違いしていたんだ。

快打音が耳に蘇る。

隣の彼女がため息をつく。

ざまあみろ。

高校を卒業して一年目、あいつは肘を壊し、二度と野球の出来ない体になった。献身的に支えようとした彼女を裏切り、あいつは別の女に走った。

高校を卒業して三年、あいつは彼女を完全に捨てた。終わりは惨めなもんだ。憧れの彼女はガリガリに痩せ、趣味の悪い髪の色で僕に泣きながら笑いかける。

「あの時はよかった」

彼女はそう言ったけど、僕に戻りたい過去はなかった。

「諦めることは簡単だよ」

彼女の流した涙の出どころがわからなくて、言われるがまま、僕はデパートでナイフを買った。

思い出の中の、制服姿の彼女は、コーヒーを啜りながら、僕に微笑みかけている。

白い息を吐きながら、裸の桜の木に囲われる校庭をぼんやりと眺めた。

攻守交代までの時間、僕たちは、くだらない会話で間を持たせていた。

「きれいな桜の下には死体が埋まっている」
世迷い言だ。

男に捨てられ、ボロボロになった彼女は実家に強制送還されるこ

とになった。都心に出てきて三年目なのに、見送りは僕一人だけだった。当然あいつはいなかった。

閉まりかけたドアの向こうで小さく手をふりながら彼女はシワがれた声で囁いた。

「あなたのせい」

意味がわからなかったけど、逃げ出した僕が悪かったのだと、その時気づいた。ベルが響いて、僕らの間に永遠の壁が出来る。

彼女も裏切られていたと感じていたんだ。

「さよなら、大好きだったよ」

ドアが閉まって彼女は地元へ送還された。

二度と会うことはない。

その2日後に、あいつはビルから飛びおりた。

二人の人生をめちゃくちゃにしたという良心の呵責に耐え切れなかったんだろ。そういうことにしておこう。

彼が死んだ夜、僕はベッドの中でいろんな夢を見た。

小学生の頃の夢、野球部の練習をいっしょに眺める夢、恋愛相談を彼女からされる夢、彼女があいつに捨てられる夢、人を、殺す夢。ドアをガンガン叩く音で目がさめる。鍵はかかってないから自由はどうぞ、と渴いた喉を震わせそう呟いた。

窓の外は、桜の雨。

まっくらでなにも、見えないけれど、僕の青春時代は今日、終わりをつけたみたいだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4604s/>

嘘つきの系譜

2011年4月14日14時40分発行